話題の本

著者に聞く

不寛容論
アメリカが生んだ「共存」の哲学

新潮選書
1600円＋税／304ページ

「礼節」さえわきまえれば嫌なやつとも一緒にはいられる

撮影：梅谷秀司

国際基督教大学教授

森本あんり

もりもと・あんり　1956年生まれ。国際基督教大学人文科学科卒業、東京神学大学大学院を経て、プリンストン神学大学院博士課程修了。専攻は神学・宗教学。『アメリカ的理念の身体』『反知性主義』『宗教国家アメリカのふしぎな論理』『異端の時代』など著書多数。

17世紀、植民地時代の米国で、政治権力が法律で礼拝を強いる教会制度に異議を唱え、また、「英国王に米国の土地を植民者に与える権利はない」とし、先住民から土地を譲り受けてロードアイランドを建設したロジャー・ウィリアムズ。互いの内心の自由の尊重から生まれる寛容は容易に不寛容へ転じることはない。

――寛容には差別的な面がある。

近代では、あなたと私は違うけれど等しい存在と考えるべきとされています。例えば、ボルテールの、君の意見には反対だが、それを主張する権利は命を懸けて守る、みたいな。本当かよってね（笑）。日本は明治時代に西洋の啓蒙思想が入ってきたので、すんなり受容していますが、そこには啓蒙主義以前の中世の知恵が反映されていなくて、ある種のきれい事です。

キリスト教支配の中世において寛容とは悪に対する態度。「寛容にする」は初めから相手を見下していて、「寛容にされる」は侮辱に近い。本来悪は罰せられるべきだが、罰することで大きな弊害が生じるなら罰さない。それが寛容。自分たちとは異質なものを受け入れる手段で、優先されるのは原理よりも実利です。主たる対象は異教徒、高利貸し、売春婦でした。

――異端には厳しいですね。

キリスト教の外にいるユダヤ人、ムスリムは周縁で受容する。今後キリスト教に帰依する可能性もある。が、異端は内側にいたのに違う主張をするので排除の論理が働きます。生かしておけない。それでユグノー戦争のような宗教戦争になるわけですが、弾圧の弊害が大きすぎるようになるとやめる。これも便法、怜悧の計算です。

――便宜主義的な寛容とは別の寛容が新大陸で生まれます。

政教分離、先住民尊重を主張
17世紀の〝変人〟に学ぶ共存

ニューイングランドへの入植はピューリタンが費用を負担する私的事業のため、同じ考えの者だけをメンバーに加えるという不寛容な性質を持っていて、社会と教会が一致していた。ただ、そうした社会もしだいに公共社会になり、メンバーも公的基準で選ぶようになります。変化した社会も教会と一致すべきと考えるのが問題だった。

英国教会の腐敗を批判したピューリタンも社会が信仰を強いる点は同じ。一方、ウィリアムズにとって、信仰は内発的なもので社会から強要されるものではない。相手がいかなる教えを信じていても、自らの良心に従っている以上、寛容に接するべきというのが彼の考え。内心の自由から生まれる寛容は、中世の寛容のように実利で不寛容に変わることはありません。

――これが政教分離につながる。

教会から離脱したら社会から追放、となると死活問題です。実際、教会を批判して離脱したウィリアムズは、真冬に植民地を追放され辛酸をなめました。教会から離れても社会の一員でいられる社会を彼はつくりたかった。そのためには社会と教会を区別する。これが政教分離の原点です。追放されたウィリアムズは親交のあった先住民の部族に身を寄せ、先住民の土地を分けてもらってプロビデンス植民地（現ロードアイランド）を建設、政教分離を統治の原理として、文書にまでしています。一般的に、政教分離の始祖はJ・ロックとされますが、ロックは半世紀前にロンドンで出版されたウィリアムズのパンフレットを読んでいた可能性があります。

――17世紀における先住民の権利の主張も先進的で驚きです。

新大陸に行った欧州人にとって、同じ形をしたものがいるが、あれは人間なのかというのが最初の問い。聖書には載っていないので、被造物とは考えなかったけれど、理性や文明を持っているとわかり、最後は自分と同じ権利を持った人間と認識する。16世紀に宣教師ラス・カサスがスペインによるインディオ支配の不当性を記していることからも、少なからぬ人が同じ認識を有していたと思われます。

それでも、植民地の土地は英国王から与えられたことになっているので、普通ならこうした話はひそひそ声になる。ところが、ウィリアムズは直情径行というか、広場で声高に話すから、社会では嫌われ、追放の一因となりました。

――新しい寛容を説いたウィリアムズが建設者となるや異議申し立てを受けるのは皮肉です。

ロードアイランドは政教分離を旨としたために、ほかの植民地での持て余し者が集まり、下水溝とまで言われます。金儲けに熱心で個人主義が徹底している。かつての異議申し立て者が政府や税金徴収の大切さに言及するなんて正反対ですが、自業自得の面もある。

また彼は、良心の自由が公共の負担を嫌う人間の宗教的隠れみのになりうると気がついた。例えば、クエーカーの良心的兵役拒否。クエーカーが良心を装っているという彼の批判は、以前彼を迫害した連中の論理と同じで、矛盾している。ただ、ウィリアムズは神学的論争をしても礼節は守り、クエーカーの礼拝を妨害などしなかった。

――礼節がカギとなる概念？

昔も今もそうです。ウィリアムズはそれを先住民から学んだ。白人たちの祈りはわからないけれど邪魔はしない。大声で妨害したクエーカーとは正反対です。

――日本人の寛容は他者への無関心による、いわば無寛容で、不寛容に転じうると懸念されています。

そうですね。ただ、日本人は意外とウィリアムズ的寛容を体現しているかもしれません。内心は嫌だと思っても顔に出さずに応対するでしょ。礼節があれば相手の話に耳を傾け、納得できなくても一緒にいることはできる。すると、いつか「いいところあるじゃないか」となる可能性もある。初めから「こんなやつ嫌だ」という本心を外に表していたら、チャンスはない。

今後、ムスリムのように近代西洋と違う論理の人と接触する機会が増えるでしょう。そのときに排除の論理を前面に出すのは論外だし、本音をぶつけ合うのがいいとは思えない。日本人の本音と建前の使い分けは、いろんな思想が入り交じる中で生きる場合、プラスに働くのではないでしょうか。

むろん、格差や分断が進んだ現在、これで万事解決なんてありえません。人間の心の中には清らかなものばかりが入っているわけではないというのがキリスト教的考え。それが人間だというさめた理解が必要です。（聞き手　筒井幹雄）